

ハ  
ノ  
7

明治十九年六月刊行

訴訟人心得 全

岩村田活版所

特

9



特 62  
985

例言 明治十九年十月八日 內務省交付 1080

明治十七年一月廿四日ヲ以テ太政官第一号布達ヲ發セラレ  
 シ以來全國各裁判所ニ於テ大ニ詞訟ノ代人ヲ許可スルノ手  
 續ヲ嚴ニセラレシヨリ各本人ハ代人ニ依頼スルノ繁ニシテ  
 自ラ出頭スルノ簡ナルヲ感シ各自出頭スルト雖モ概テ事ニ  
 馴致セザルノ輩ナルヲ以テ或ハ出訴ノ手續ヲ誤リ或ハ充分  
 ノ權利ヲ伸強スル能ハサル者アリテ其不便實ニ甚タシト聞  
 シ依テ此書ヲ編ス故ニ編纂順序ノ如キニ至ツテモ僅カニ其  
 首ニ裁判所取締規則ヲ掲ケ直ニ勸解手續ニ及フ之レ專ラ實  
 益ヲ主トスレハナリ庶幾クハ詞訟ヲ爲サントスルモノ此書  
 ニ依テ以テ其大体ヲ知ルヲ得ハ幸甚

勸解始審ノ手續等ニ至ツテハ其地方ニ因リ幾分ノ差異アリ



ト雖此書ニ載スル処ハ專ラ控訴院ノ設ケアル地ノ例規ニ  
據ル且ツ讀者參考ノ爲メ法理ノ一斑ヲモ併示ス

訴訟人心得目錄

裁判所取締規則	一
勸解手續	三
始審手續	二十八
控訴上告手續	三十九
控訴	三十九
上告總則	四十一
民事上告	四十二
出訴期限	五十一
司法省達	五十五
全	五十六
負債者出踪後ノ訴訟	五十九



裁判執行	六十一丁
身代限	六十四丁
訴訟入費償却規則	七十八丁
治安裁判所及始審裁判所權限	八十八丁
控訴裁判所權限	八十九丁
大審院權限	九十丁
代人規則	九十二丁
詞訟代人	九十五丁
民事訴訟用印紙規則	九十六丁
司法省告示	百丁
証券印稅規則	百一丁

訴訟人心得

裁判所取締規則

第壹條 訟庭ハ訴訟口詰必ズ出席シ訴訟人ヲ順序ニ呼込ミ裁判官ノ命ニ從ヒ矢敬又ハ紛聞ノ事アラサル様其取締ヲ爲ス  
 ～キ事

第貳條 原被告人ヲ始メ代言人等總テ訟庭ニ出ル者ハ呼込ミノ次第ニ從ヒ沈黙整列シ裁判官出席スレハ各々起テ禮ヲ爲スヘシ

第三條 原被告共其事情ヲ餘蘊ナク幾回モ詳細ニ陳述スヘシト雖互ニ發言スル者ノ言終リタル後ニ非レハ更ニ其言ヲ發スヘカラス

第四條 凡ソ進退動作ハ輕躁ニ涉ラス言語ハ憤怒高激ニ涉ラ



ス諄々トシテ其事情ヲ陳述シ且裁判官ニ對シテ尊敬ヲ致スニ注意スヘシ

第五條 前條ニ記載シタル事ヲ守ラズ裁判官ニ對シ尊敬ヲ欠ク者アルキハ裁判官直ニ譴責ヲ加フヘシ

第六條 譴責ヲ加フヘキ者アルキハ其裁判ヲ中止シ犯則ニ關係ナキ者ハ一旦扣所ニ退カシメ然ル後犯則ノ者ヲ譴責スヘシ

第七條 裁判官ヲ嘗ル者アルキハ前條ノ如ク其裁判ヲ中止シ之ヲ斷獄課ニ付シ本律ヲ科スヘキ事

第八條 裁判ノ時公聽ヲ許サレタル者ハ人々皆沈黙敬聽スヘシ

但裁判官審問ノ際公聽ノ者若シ紛聞ニシテ審問ノ妨礙ア

リト思量スルキハ便宜ヲ以テ訴訟口詰ニ命シ公聽ノ者ヲ退カシムヘシ

### 勸解手續

夫レ勸解ハ權利者義務者ノ願意ニ隨ヒ其證據物ノ有無ニ拘ハラズ双方ノ私情ヲ酌料シ說諭ヲ加ヘ和解ニ至ラシムルヲ主トスル者ナルカ故ニ其出願ノ手續ニ至リテモ亦簡便ヲ主トシ佞令無筆文盲ノ者タリモ其情實ヲ陳述スルニ於テ差問ナキ様ニナスヲ要ス故ニ其願書モ只半紙ヲ二ツ折ニシテ其前半面ニ出願ノ要領ヲ掲クルヲ以テ足レリトス今其例ヲ示サンニ貸金催促ノ如キニ於テ通常左ノ雛形ノ如ク認ムルモノナリ



何府(縣)何郡(區)何町(村)何番地  
華士族平民

原告 何 某印

若シ代人ナレハ右ノ次ニ代人ノ住  
所身分ヲ書シ署名捺印スヘシ但本  
人ハ捺印スルニ及ハス

貸金催促之勸解願

元金何圓

年月日貸付

年月日期限

利子何圓

合金何圓請求高

何年何月何日

被告 何 某

凡ソ勸解ヲ出願スルニ付テハ右ノ如ク其要領ヲ舉グルヲ要  
スレモシ簡略ニ記載シ難キ訴訟例ヘハ地所境界論ノ如キニ  
於テハ目安ト原被告人ノ氏名ヲ書スルヲ以テ足レリトス  
勸解出願スルニ付テハ願書通例一般ニ要スル者ナレモシ無

筆文盲等ニテ認メ難キ時ハ治安裁判所ニ出頭シ其情實ヲ陳述  
スルヲ得ヘシ

勸解ハ其爭論ノ始末ヲ本人ヨリ直ニ聞取ニアラサレハ事情ヲ  
尽シ難ク隨テ説諭ノ上和解ニ至ルヘキ事柄モ却テ整ハサル様  
ノヲアルカ故ニ可成丈本人自ラ出頭セサルヘカラス但本人疾  
病等不得已事故アルキハ親屬又ハ相當ノモノヲ以テ代人トシ  
テ出願セシムルノ許可ヲ仰クヘシ斯ル時ニハ本人ヨリ代人願  
ト委任狀トヲ代人ニ渡ササルヘカラス又勸解ニハ代言人ヲ用  
ユルヲ得ス代人トシテ差出ス事ヲ得ヘキノミナリ

代人許可願ノ書式

代人許可願

一何府縣郡區町村番地(華士族或ハ平民)(原被告)何某(或



ハヨリ)係リ(何々一件)御勸解上願致候ニ附テハ自身出頭可仕之處(別紙醫按ノ通り疾病ニ付)(或ハ不得止事故有之候ニ付別紙戸籍寫ノ通親屬(或ハ故舊ナル)何某ヲ以一件結局迄代理爲致度最トモ彼ヨリ上仰且御請致ス事柄共將來自分ヨリ異儀申上間敷候條御許可被成下度別紙相添連署ヲ以テ此段奉願上候也

何府縣郡區町村番地身分職業

年月日

原被告 何 某(印)

何府縣郡區町村番地身分職業

代人 何 某(印)

某治安裁判所長

判事補何某殿

右ノ代人許可願ヲ預メ管轄裁判所へ捧呈シ許可ヲ得テ后更ニ勸解又ハ本訴ヲ仰クヘシ其際該聽届ノ証ヲ添エルモノナリ本訴モ又之ニ全シ

- 一 醫師ノ容体書ニハ當人ノ住所、身分、職業、年齢、病名、投劑、經過、豫期、等ノ記載ニ注意アルヘシ
- 一 親屬タルコトヲ証スニハ本人及代人双方戸籍ノ寫及戸長ノ保証書ヲ要ス
- 一 委任狀書式左ノ如シ

委任狀

拙者儀病氣ニ付何某ヲ以テ部理代人ト相定メ拙者ノ名儀ニテ左ノ權限ノコトヲ代理爲致候事



一何々ノ事（委任スヘキ權限ヲ分項記載スヘシ例ヘハ  
 貸金催促ノ原告タルキハ「拙者ヨリ住所身分氏名ヘ  
 相係ル貸金催促勸解願一件ニ付キ某裁判所ニ於テ結  
 局迄辨論一切ノ事」ト書スヘシ若シ被告タルキハ住  
 所身分氏名ヨリ相係ル貸金催促勸解願一件ニ付某裁  
 判所ニ於テ結局迄答辨一切ノ事）ト書スヘシ  
 右代理委任狀仍而如件

住所身分

何

某



年月日

本人ヨリ委任ヲ受ケタル代人ニ於テハ代人願診斷書並ニ委任  
 狀寫ヲ訴狀ニ添テ之ヲ裁判所ニ呈スヘシ  
 裁判所ニ於テ訴狀ヲ受理セラレタルキハ被告人ヘノ呼出狀ハ

使丁ヲシテ被告ニ之ヲ送達セラル、ヲ以テ原告ハ其配達賃ヲ  
 使丁ヘ拂フヘシ而シテ右呼出狀ニハ番号記載アレハ宜シク之  
 ナ留メ置クヘシ掛官ハ出訴ノ當日ヨリ定マルアリ或ハ其翌日  
 定マルモアリテ各裁判所ニ依リテ其成規異ナレハ出頭スル者  
 ハ其心得ニテ少シク注意スレハ直ニ之ヲ知ル事ヲ得ヘシ  
 凡ソ何レノ時ヲ問ハス裁判所ニ出ツルニハ必ス名刺ヲ持參ス  
 ヘシ而シテ名刺ノ數ニ至リテハ東京大阪ノ如キ僅々ノ裁判所  
 スラ尙ホ異同アルヲ免レサレハ況シテ全國無數ノ裁判所ニ於  
 テハ其數モ亦一定セサルヘシ玆ニ其大畧ヲ舉ケンニ先ツ概ネ  
 半紙ニツ折ニ認メタル名刺二枚ヲ要シ或ハ半紙四ツ切ニ認メ  
 タル名刺一枚ヲ要スルヲ通例トセリ諸テ名刺ノ認メ方ハ左ノ  
 通り



着到并出門

何年第何号

(新クニ訴フルキハ  
只新訴ト書スヘシ)

御掛何某殿

住所 身分  
原被告 何 某

何々ニ付出頭

年月日時

原被告何某へ係ル件

名 刺 雛 形

已ニ勸解ノ日時定マリタルキハ原被告其當日ニ裁判所ニ出頭  
シ前ニ掲ケタル名刺ヲ裁判所ノ受付ニ差出シ置クヘシ若シ又  
被告トナリテ裁判所ヨリ召喚ヲ受ケテ出頭シタルキハ召喚狀  
ヲモ名刺ニ副ヘテ差出スヘシ出頭ノ上ハ訴訟口詰ノ呼込ニ  
應シテ訟庭ニ入ルヘシ

訟庭ニ入リタル上原被告裁判官ノ勸解説諭ニ依リ双方示談相  
整ヒ濟口トナリタルキハ左ノ如キ書式ニ從テ其趣意ヲ認メ差  
出スヘシ

第何號

何郡何町何番地  
區何村

御掛何某殿

身分

原告人

何

某

何々ノ勸解願濟口御届

何郡何町何番地  
區何村

被告人

何

某

(此處ニ濟口ニ至リタル事故ヲ書スヘシ)例スレハ貸金  
催促ナラハ請求高ノ内何圓ハ當日受取何圓ハ証文ニ直ス



等其濟口トナリタル事故ヲ書スルコナリ  
右私共ヨリ何々ノ儀勸解奉願候處御説諭ニ基キ前書ノ  
通リ濟方相成候間此段御届申上候以上

年月日 原告人 何 某 印

被告 人 何 某 印

某治安裁判所長  
判事補何某殿

又金錢上ノ勸解願ニテ被告人ニ於テ身代限ヲ以テ濟方ヲナシ  
并ハ左ノ如キ書式ニ從ヒ其事由ヲ認ムヘシ

第何號 身代限濟方對談書  
御掛何某殿

一元金何圓  
一利金何圓  
合金何圓  
內

一金何圓 御勸解中抵當家屋公賣代受取

差引

殘金何圓 滯金

私共貸金催促ノ儀御勸解奉願候處御説諭ニ基キ被告  
人何某儀償却方相辨候處金圓調達兼候ニ付前書滯高  
身代限ヲ以テ濟方致候管示談行届候此上右御處分被  
成下度此段奉願候也

何郡何町何番地  
區



年月日

原告人

何

某印

何郡何町何番地

被告人

何

某印

某治安裁判所長

判事補何某殿

右ヲ裁判所へ差出スルハ區役所或ハ戸長役場へ宛テタル封書ヲ下附サル、モノナリ此時左ノ如キ請書ヲ呈ス

何號

御請書

一何區役所或ハ戸長役場へノ封書

壹通

右正ニ請取申候至急區役所へ差出可申候依テ御請書如件

住所

年月日

何

某印

某治安裁判所長

判事補何某殿

右ノ手續ヲナシタル上財産調モ濟ミ身代限處分揭示後六十日間ヲ過キ財産公賣ノ上原告人ニ於テ金圓ヲ受取リタルハ左ノ如キ書式ニ從ヒテ認メタル書面ヲ出スヘシ

御請書

一金何圓

一御裏書濟証書

何通

右ハ何郡區町村何某へ係ル貸金催促ノ末身代限ヲ以テ濟方可仕旨原被連印ヲ以テ申上置本日財産公賣代金前書ノ金額御下ケ渡シノ上殘額証書へ御裏書御下附相成正ニ受取申候仍テ御請書如件



年月日 原告人 住所 何 某印  
 某治安裁判所長  
 判事補何某殿

若シ又被告ニ於テ原告ノ請求スル處ヲ拒ミ之ニ應セサルキハ  
 其勸解ハ不調トナルナリ如此場合ニ於テハ裁判官ノ命ニ依リ  
 或ハ証書ノ寫シ或ハ其請求ノ趣意書ヲ差シ出シ不調籤ヲ乞ヒ  
 請クヘシ不調籤ハ後日出訴ノ時ニ於テ入用ナルモノナレハナ  
 リ  
 証書寫ノ認メ方ハ左ノ如シ

証書寫

何々(此處ニ証書ノ全文ヲ寫載ス)

右寫之通ニ相違無御坐候  
 年月日 住所 姓名 印  
 某治安裁判所長  
 判事補何某殿

趣意書ノ認メ方ハ左ノ如シ

趣意書

自分ヨリ今般何某へ掛リ何々ノ勸解出願仕候趣旨ハ左  
 ニ陳述可致  
 (此處ニ勸解出願ノ趣旨ヲ書載スヘシ)  
 右之通ニ有之候也  
 住所



年月日

原告人 何

某 印

某治安裁判所長

判事補何某殿

右ノ証書ニ不調ノ付箋ヲナシ又ハ特ニ之レヲ下付サレタル片ハ左ノ如ク認メタル受書ヲ差出スヘシ

御係何某殿 御受書

第何號

一不調箋

壹葉

右ハ被告何某へ係リ御勸解願上候處本日不調ニ據リ御下付相成正ニ領收致候仍テ御受書如件

何府縣郡區町村番地身分

年月日

原告 何

某 印

某治安裁判所長

判事補何某殿

右ニ述ヘタル處ハ出願ノ日ヨリ結局ニ至ルマテ故障ナク濟ミタル者ナレモ或ハ被告人ノ不參シテ出庭セサル如キ事不少或ハ又仮令ヒ被告トナルモ無余儀事ニテ當日召喚ニ應シ難キ事アリ或ハ示談濟口ヲナサンガ爲メニ猶豫ノ期限ヲ乞フコトアリ其他種々ノ故障生シ來ル者ナレモ一々茲ニ掲載シ難ケレハ只ク其大體ニ基キ臨機應變之レニ當ラレシコトヲ希望スルノミ今茲ニ其主タル者ヲ掲載セン  
原告又ハ被告人ニ於テ不得止事故アリテ不參又ハ遲參セントスル時ハ其趣キヲ出頭時刻前ニ願出ヘシ



遅刻(不参)御届

番號

何郡區何町村何番地

御掛何某殿

原(被)告

何

某

右ハ何郡區町村番地何ノ某へ掛ル(被告ナレハ)何ノ某ヨリ掛ルト書ス)何々ノ件ニ付キ本日出頭當日ニ付キ私儀例刻出頭可仕處何々(事故又ハ病氣ノ次第ヲ記ス)ニテ出頭致兼候ニ付何日何時迄御猶豫被成下度此段奉願上候也

右

年月日

何

某

印

某治安裁判所長

判事補何某殿

又無届ニテ不参シ始末書ヲ差出スキハ左ノ書式ニ從フテ其旨ヲ認ムヘシ

始末書

番號

住所

身分

御掛何某殿

生國

何

某

何宗

本月何年何月

右何郡區町村番地身分何某ヨリ係ル何々ノ件ニ付キ昨幾日例刻出頭可仕之處何々ニテ(其事故ヲ書ス)竟ニ無届不参仕候段奉恐入候  
右之通り相違無之候也

右

年月日

何

某

印



某治安裁判所長

判事補何某殿

又被告無届ニテ不參シタルハ原告人ニ於テ召喚願ヲ差出ス書式ハ左ノ如シ(引立願ヲ乞フ書式ハ次節ニ記シアルヲ以テ略ス)

被告御召喚願

番號

住所

身分

御掛何某殿

被告

何

某

何月何日出

右者本日御喚出(或ハ延期)當日不參仕候ニ付頭書ノ當日本人御呼出被下度奉願候也

何郡何町何番地

年月日

原告人

何

某印

某治安裁判所長

判事補何某殿

但被告ニ於テ使丁賃不拂ノ際ハ原告ヨリ收納致可申候

又原被示談行届キ延期ヲ乞フキニハ左ノ書式ニ從ヒ其旨ヲ認ムヘシ

延期願

番號

住所

御掛何某殿

原告

何

某

住所

被告

何

某

右何々(其訴名ヲ記ス)御勸解奉願候處今般双方示談行届キ候間右取運ヒ中來ル何月何日迄延期御猶豫被成下



度此段奉願候也

年月日

右 何 某 印  
右 何 某 印

某治安裁判所長

判事補何某殿

(本節ノ法理) 勸解ハ只一ノ説諭ニ止マルモノナレハ原被其説諭ニ從ハサレハ裁判所ニ於テハ強テ從ハシムル能ハズ只不調トシテ斥クルニ止マルモノナリ此故ニ原被始メハ裁判官ノ説諭ニ從ヒ濟口ヲ契約シオキナカラ後日ニ至リ其濟口通りニナサ、ルモ裁判官ハ被告ニ迫テ濟口通り執行セシムルノ權ナキモノナリ

(本節ノ注意) 凡ソ裁判所ニ出ツルニハ必ス實印ヲ携帯スヘ

シ是レ特ニ治安裁判所ノミニアラス何レノ裁判所ニ出ツルニモ必ス忘レサル様注意スヘシ  
治安裁判所ニ於テ勸解ヲ受クルキニハ證據物アラハ悉ク携帶スヘシ提出シタル證書ニハ掛官ノ認印ヲ受ケオクヘシ  
治安裁判所ニ出ス書類ハ凡テ半紙ヲ以テスヘシ又訴訟印紙ヲ用ユルニ及ハズ是レハ勸解ニ於テ然ルモノニシテ治安裁判所ニ於テ始審ヲ受クルキハ通常始審ノ裁判ト同シナリ  
次節始審ノ手續ノ部ニ詳カナリ就テ見ルヘシ  
勸解ハ双方共必ス本人自ラ出訴スヘシ何ソトナレハ勸解ハ固ト説諭ノ上和解ヲ主トスル者ナレハ代人等ニテハ事情ヲ詳カナシカタク且ツ代人ニ於テハ利害ノ關係并ニ道德上良心ヲ責ムルノ感覺薄キ者ナレハ容易ニ説諭ニ從ヒ和解シカ



マキノ傾向アルヲ免レサレハナリ若シ不得止ノ事アルキハ  
 其代人トシ親戚又ハ定リタル雇人ヲ出スヘシ是レ等ハ由縁  
 ナキ他人ヨリ大ニ勝ル所アレハナリ仍テ再ヒ茲ニ復説ス  
 勸解事件ニ付キ係リ官番號等定リタルキハ宜シク記憶シオ  
 シヘシ若シ然ラサルキハ大ニ紛雜ヲ起スコアルヘシ又書面  
 等ヲ差出スニハ必ス係リ官及ヒ番號ヲ記載スヘキ者トス  
 原告ノ手ヨリ召喚狀ヲ被告人ニ渡シタルキハ必ス受取証ヲ  
 取り置クヘシ是亦後日被告ノ出頭セサル時之ヲ責ムルノ証  
 憑トナスヘキ者ナレハナリ然レモ若シ召喚狀ヲ原告ニ渡サ  
 スシテ裁判所ヨリ直ニ被告ヘ送附スルノ地方ニ在リテハ此  
 限リニアラス

訴訟事件ハ必スシモ勸解ヲ經サレハ出訴スルヲ許サ、ルニ

ハアラス其事ハ前節權限ノ部ニ掲載シオケリ就テ見ルヘシ  
 聊カ注意ノ爲メニ一言シ置クニ爾リ



始審手續

侵害セラレタル權利ヲ回復セシカ爲メニ義務者ヲ治安裁判所  
へ訴へ勸解ヲ乞フト雖トモ義務者不當ノ陳言ヲナシ頑平トシ  
テ我要求ヲ拒絕スルニ當リテハ權利者ハ亦勸解ニ依頼シテ其  
權利ヲ回復シ得ヘカラス必スヤ其他ニ救正ノ途ヲ求メサルヘ  
カラス而シテ其途タル只之ヲ治安裁判所へ訴タヘ出ツルニ外  
ナラサルナリ而シテ治安裁判所ハ其權限タル甚タ狭マケレハ  
勸解不調トナリタル事件ニ付キ出訴スル者アルモ悉ク之ヲ受  
理スルヲ得ス唯金額百圓ニ滿タサル事件ヲ受理シテ裁判スル  
ヲ得ルノミ始審裁判所ハ之ニ反シ金額百圓未滿ノ事ヲ除キ其  
餘ノ事件ヲ受理シテ裁判スルヲ得其詳細ナルハ載セテ裁判  
所權限ノ部ニ在リ如此治安裁判所ト始審裁判所トハ其權限ヲ

異ニスルニ拘ラス勸解不調トナリタル事件ヲ受理シテ始テ審  
判ヲナスコトハ同一ナレハ共ニ之ヲ始審ト稱シ出訴ノ時ヨリ審  
判ノ日ニ至ルマテ其手續ハ全ク相同シ始審ノ出訴ヲナスニハ  
先ツ其出訴ノ趣意ヲ詳ラカニ認メタル訴狀正副二冊若シ証據  
物アレハ其寫二冊ニ勸解不調箋ヲ添ヒ且其正本ニ相當印紙ヲ  
貼用消印ノ上名刺ト共ニ裁判所ニ呈スヘシ  
若シ代人ヲ以テ出訴スルキハ前節ニ記載シタル委任狀寫ト聞  
濟指令附代人願トヲ裁判所ニ捧呈スヘシ  
此ニ用ユル代人許可願ノ書式ハ前節ニ掲クル者ト異ルヘシ  
但シ代人ヨリハ左ノ上申書ヲ呈スヘシ

上申書

原告何某ヨリ被告何某へ係ル何ノ詞訟受任ノ事件外ニ



詞訟又ハ執行願等ニ至ル迄他ニ受任ノ事件無御坐候  
右上申仕候也

何郡何町何番地

年月日

原被告人

何某印

所長宛

訴狀ニ奥書ノ上原告人ニ之ヲ示サレタルキハ左ノ雛形ノ如キ  
請取書ヲ裁判所ニ呈スヘシ而シテ訴狀ハ使丁ニ於テ被告方へ  
送達スヘシ  
第何號

御請書

何府縣郡區町村身分被告何某へ係リ何々一件本日起訴致候處  
御受理ノ上訴狀へ御添書使丁ヲシテ御送達而シテ原告義ハ何

月幾日例刻証據物携帶出廷可致旨御達ノ趣奉畏候仍テ御請書  
如件

何府縣郡區町村番地身分

年月日

原告

何某印

某始審裁判所長

判事何某殿

原告自カラ訴狀ヲ被告人ニ送達シタルキハ左ノ雛形ノ如キ受  
取書ヲ取り置クヘシ

何年何號

一奥書訴狀

壹册

右正ニ受取申候也

年月日

何某印



何某殿

被告ニ於テハ訴狀ヲ受取タルヨリ一週間内ニ答書正副二通若シ證據物アレハ其寫本二冊ト共ニ之ヲ裁判所ニ差出ス可シ若シ代人ヲ用ユルコトアラハ前節ノ雛形ニ準シテ之ヲ認メ裁判所ニ捧呈シテ許可ヲ乞フヘシ

被告ニ於テ附シタル答辨書ヲ原告ニ於テ受取リタル上尙ホ新タニ答辨スヘキ事項アラハ前同様ノ手續ヲ以テ辨論書ヲ出スコトヲ得其後裁判所ニ於テハ日時ヲ定メ原被兩造對審ヲ開カル此時原被告共ニ出廷シテ充分ニ訴訟事件ヲ開陳シ訴狀ニ書キ盡セヌ事情ヲモ陳述スルコトヲ得ヘシ對審終リシ後原被兩造共ニ其事情ヲ盡シテ亦餘蘊ナク陳述スヘキ事項モナク提供スヘキ證據モ全ク盡クルニ至ルキハ之ヲ稱シテ結審ト云ヒ之ヨリ

裁判言渡アルヘキナリ裁判言渡アリテ裁判狀ヲ下附サル、キハ左ノ如キ受書ヲ差出スヘシ

御 受 書

何年何号

原被告何某へ係ル何々一件

一裁判言渡書

壹 通

右ハ本日御言渡ノ上御下附相成リ正ニ奉受取候也

右

年月日

原被告

何 某 印

所長宛

以上述ヘタル處ニテ大略始審手續ハ尽キタル如クナレモ實際ハ中々如此無滯結局ニ至ルコトハ稀ナルモノナリ加之尙手續上必ス爲サルヲ得サルノコトモ或ル場合ニ於テ生スル事ナシモ



云フ可ラサレハ變ニ應スルノ手續ヲ之ニ示スヘシ  
被告タル者不參シテ召喚日ニ出廷セサルキハ原告ニ於テハ何  
日ニ召喚アラノコトヲ請フコトヲ得ヘシ其認メ方ハ左ノ如シ

番号 御召喚願

係官名 住所身分

何月幾日出 被告 何 某

右ハ本日御召喚ノ處出廷不仕候自分繁忙ノ身ニテ空シ  
ク時日ヲ費シ候テハ困難不少候ニ付頭書ノ當日出廷可  
致様御召喚被成下度此段奉願上候也

住所身分

年月日 原告 何 某 印

所長宛

被告ニ於テ不參スルコト數々ニシテ三四回モ召喚ニ應セサルキ  
ハ裁判所ニ請願シテ拘引スルコトヲ得ヘシ其書式ハ左ノ如シ

御引立願

住所 身分

被告 何 某

右ハ度々御召喚相成候得共每度不參致シ出庭不仕爲メ  
ニ訴訟事件モ延滞仕リ原告ニ於テ迷惑不少候被告ニ於  
テ出庭不致ハ畢竟訴訟ヲ延滞ナサシメ原告ノ權利ヲ蹂  
躪スルノ心意ニ出テタル者ト推察致候ヘハ此上幾度御  
召喚相成候モ出庭不仕ハ必然ノコト存候間何卒公力ヲ  
以テ速ニ御引立被成下度此段奉願上候也

住所



年月日

所長宛

原告

何 某 印

原告又ハ被告ニ於テ疾病等不得止事故アリテ出庭致シ難キ時  
ハ其前日若シハ當日早朝裁判所ニ申出テ猶豫願ヲ爲スヘシ其  
書式ハ左ノ如シ

御猶豫願

御廳何年何号件ニ付本日御召喚ノ處何々(疾病等不得止  
事故ヲ書スヘシ)ニ付頭難致候間來何日午前何時迄御  
猶豫被成下度然ル上ハ右同日同刻必ス出頭可仕候間何  
卒御聞濟被成下度此段奉願上候也

住所

年月日

原(被)告

何

某 印

所長宛

原被兩造共ニ對審中ニ於テ發見シタル事故若クハ訴狀ニ洩レ  
タル事等アラバ結審ニ至ル迄ハ何時ニテモ書面若クハ口上ニ  
テ申立ルヲ得ヘシ口上ニテ申述ヘントセハ尙對審ヲ開カレン  
トナ請願スヘシ書面ニテ出スキハ之ヲ辨論書トナシテ出スヘ  
シ此等ノ書面ハ何レモ二通ヲ差出スヘシ

訴訟中被告ニ於テ訴訟ノ目的タル物件ヲ破壞隱匿若クハ他ニ  
運出セントスル恐レアルキハ原告ハ其物件ノ差押ヲ裁判所ニ  
請求スルヲ得ヘシ又其訴訟ノ目的タル物件ハ被告ノ行爲ニシ  
テ若シ被告ニ於テ依然其行爲ヲ繼續スルキハ爲メニ原告ニ於  
テ損失ヲ受クヘキヲ明瞭ナルキハ其行爲ノ停止ヲ裁判所ニ請  
願スルヲ得ヘシ又原告ノ請願ナシト雖モ裁判所ノ意見ヲ以テ



之ヲ行フヲ得ヘシ然レモ審理ノ末原告ノ曲者ニ歸シタルモ被告ノ損失ヲ償ハシメシカ爲メニ保証金トシテ當初原告ハ被告ノ請求又ハ裁判所ノ命令ニ從テ若干ノ金圓ヲ裁判所ニ預ケ置カサルヲ得ス然ラスノハ通常差押ヲ請願スルヲ得サルナリ此請願ハ裁判確定ニ至ラサル間ハ何時ニテモナスヲ得

控訴上告手續

第一章 控訴ノ事

第一條 凡ソ地方裁判所(即チ現今始審裁判所)ノ初審ニ服セズシテ再ヒ上等裁判所(即チ現今控訴裁判所)ニ訴ヘ覆審ヲ求ムル者之ヲ控訴ト云フ

第二條 控訴ハ民事ニ止ル刑事ニ及ハス

第三條 控訴ハ一タヒスルヲ得再ヒスルヲ得ス

第四條 地方裁判所ニ於テ裁判ノ言渡ヲナシタルモ原告被告ノ双方又ハ一方ノ者其裁判ニ不服ナルモハ裁判言渡ヨリ第七日マテニ(裁判言渡ノ翌日ヨリ數フ)裁判言渡ノ事理ヲ熟考シ其翌日ニ至リ控訴スルヲ得ヘシ但シ訴訟ノ案件商事ニ係リ急速ニ扣訴スルヲ要スルノ場合ニ於テハ七日内ト



雖此扣訴スルヲ得

第五條 地方裁判所ノ裁判言渡ヨリ三ヶ月(三十日ヲ以テ一月トス「編者曰ク現今ハ三ヶ月ヲ改メテ二ヶ月ト定メテレタルハ六十日内ニ扣訴セサルヘカラス」ヲ過クルキハ扣訴スルヲ許サス

但シ地方裁判所ヨリ上等裁判所ニ至ルノ距離八里ヨリ遠キキハ期限三ヶ月ノ外八里毎ニ一日ノ猶豫ヲ與フヘシ

第六條 扣訴ヲナス者ハ其初審ヲ受ケタル地方裁判所ニ届出ヘシ但シ添翰ヲ乞フニ及ハス

第七條 前條ノ届ヲ受取リタル地方裁判所ハ裁判言渡ノ執行ヲ停止スヘシ若シ上等裁判所ノ請求アルキハ地方裁判所ニ於テノ訴狀答書口書裁判見込等ヲ差出スヘシ

第八條 上等裁判所ニ捧クルノ訴狀ハ訴答文例ニ照準スヘシ

第二章 上告總則ノ事

第九條 各裁判所ノ終審ヲ不法ナリトシ大審院ニ向テ取消ヲ求ムル者之ヲ上告ト云フ

第十條 上告スルヲ得ルノ事件ハ

第一 裁判所管理ノ權限ヲ越ユ

第二 聽斷ノ定規ヲ乖ク

第三 裁判法律ニ違フ

第十一條 大審院ハ上告ヲ受クルノ所ニシテ扣訴ヲ受クルノ所ニアラズ故ニ控訴スヘキノ事ヲ以テ誤テ上告スル者アルモ之ヲ斥ケテ受理セズ

第十二條 陸海軍ノ裁判權限ヲ超ユル者ハ之ヲ大審院ニ上告



スルヲ得

第十三條 凡上告シタル者已ニ大審院ノ判決ヲ經レハ更ニ訴フルヲ得ス

第三章 民事上告ノ事

第十四條 民事ノ上告スルヲ得ル者ハ已ニ上等裁判所ニ扣訴シ其判決ヲ經タル者ニ限ル

第十五條 上告ヲ爲サント欲スル者ハ裁判言渡ヨリ二月内ニ上告狀ヲ大審院ニ捧クヘシ而シテ同時被告人ニ通知スルヲ要ス若シ原裁判所ヨリ大審院ニ至ルノ距離八里ヨリ遠キ時ハ二月ノ外八里毎ニ一日ヲ増ス此定期ヲ過クレハ上告スルヲ許サス

上告狀中ニハ必ス左ノ事實ヲ記載スヘシ

第一 原告人ノ住所身分氏名

第二 代言人アレハ其住所身分氏名

第三 被告人ノ住所身分氏名

第四 証人又ハ引合人アレハ其住所身分氏名

第五 地方裁判所ニ出訴シ又ハ被告ニテ呼出チシタル年月日及ヒ裁判言渡ヲ受ケタル年月日

第六 上等裁判所ニ扣訴シ又ハ被告ニテ呼出サレタル年月日及ヒ裁判言渡ヲ受ケタル年月日

上告狀ハ正本壹冊副本五冊ヲ差出スヘシ

上告狀ニハ必ス左ノ書類ヲ添ヘ差出スヘシ

第一 地方裁判所ニ於テノ訴狀并ニ答書ノ寫及ヒ裁判言渡書ノ寫

第二 地方裁判所ニ於テノ訴狀并ニ答書ノ寫及ヒ裁判言渡書ノ寫

第三 地方裁判所ニ於テノ訴狀并ニ答書ノ寫及ヒ裁判言渡書ノ寫



第二 上等裁判所ニ於テノ書類并ニ答書ノ寫及ヒ裁判言渡書ノ寫

第三 上告狀中ニ憑據トナス書類ノ寫ノ各書類ニ番号ヲ朱書シ編シテ一冊トナシ又ハ葉數多ニ付編シテ幾冊トナシタル者

右ノ訴狀又ハ答書及ヒ憑據ノ書類ノ寫ヲ所持セサル者ハ原裁判所ニ出願シ裁判所ノ簿冊ヲ訟庭ニ取下ケ見坐ノ目前ニ於テ之ヲ寫シ取ルヲ得ヘシ

若原裁判所ニ於テ書類寫取ノ出願ヲ許サ、ルニ因リ上告人其寫ヲ出シ能ハサルキハ其旨ヲ上告狀中ニ記載スヘシ

第十六條 上告者ハ其上告狀ニ添ヘテ金拾圓ヲ大審院ニ預クヘシ若シ其金高ヲ預ケサル時ハ上告ヲナスヲ得ス

第一 若シ上告ヲ取上ケサル時ハ其預金ヲ没入ス

第二 若シ上告ヲ取上ケ原裁判ヲ破毀シタルキハ預リ金ヲ還附ス

第三 若シ上告ヲ取上ケ被告人ト對審シタルノ後之ヲ斥ケテ原裁判ヲ破毀セサル時ハ預リ金ヲ没入シ又訴訟入費規則ニ照シテ被告人ノ費用ヲ償ハシム被告人トハ上告者ノ相手方ヲ云フ

第十七條 上告ヲ爲ス者ハ原裁判所ニ届出ツヘシ原裁判所ニ於テハ書類ヲ三日内ニ大審院ニ遞送スヘシ

第十八條 上告ニ付テハ裁判ノ執行ヲ停メス（大審院已ニ原裁判ヲ破毀スルニ至レハ即日原裁判所ニ通報シテ大審院ヨリ郵信ヲ發ス）執行ヲ止メ更ニ審判落着ノ日ニ至テ前ノ執



行ヲ取消シテ後ノ裁判ヲ執行セシムヘシ

但内國人ヨリ裁判外ノ人民ニ對シ又ハ裁判外ノ人民ヨリ

内國人ニ對スル裁判ハ原裁判ノ執行ヲ停ムヘシ

第十九條 上告狀ハ原告人自ラ之ヲ捧クルモ又ハ代理人ヲシ

テ之ヲ捧ケシムルモ本人ノ意ニ任ス

第二十條 大審院ニ於テ判事審聽シ不當ナル上告ナリト決ス

ルキハ何々ノ理由ヲ以テ上告受理セサルノ旨ヲ言渡スヘシ

第廿一條 判事審聽シテ當然ノ上告ナリトシ之ヲ判決スヘキ

旨ヲ言渡シタルキハ其後二日內ニ被告入呼出狀ヲ仕出スヘ

シ此呼出狀ニハ上告狀ノ副本ヲ添ユヘシ

第廿二條 被告人ハ呼出狀ヲ受取リタルヨリ三十日內ニ答辨

書ヲ作り自身又ハ代理人ヨリ之ヲ大審院ニ捧クヘシ但被告

人ノ所ヨリ大審院ニ至ルノ距離八里ヨリ遠キ時ハ八里毎ニ  
一日ヲ増スヘシ

第廿三條 大審院ニ於テ被告人ノ答辨書ヲ受取リシキハ院長

ヨリ判事ノ中ニ於テ一人ノ主任ヲ命シ一件書類ヲ取纏メ遲

緩ナク一件始末書ヲ作ラシメ然ル後ニ原被對審ノ日ヲ豫定

シ三日以前ニ原被對審ノ呼出狀ヲ原被双方ニ送達スヘシ

第廿四條 原被對審ノ節ハ判事席ニ臨ミ最初ニ主任判事一件

始末ヲ宣讀シ次ニ原告ノ陳述次ニ被告ノ陳述次ニ原被交互

ノ論辨ヲ審聽シ而シテ後ニ原告人上告理アリト決スルキハ何

々ノ理由ヲ以テ原裁判所ノ裁判ヲ破毀スルニ付キ更ニ某裁

判所ニ於テ裁判ヲ受クヘキ旨又ハ大審院ニ於テ裁判スヘキ

旨ヲ言渡スヘシ



第廿五條 若シ原告人ノ上告理ナシト決スルキハ何々ノ理由  
ヲ以テ上告ヲ斥ルル日ヲ言渡スヘシ

(本節ノ注意)控訴ヲ爲サントスルモノハ控訴ノ届ヲ原裁  
判所ニ差出スコトハ第一章第六條ニ定ムル所ナリ茲ニ其書  
式ヲ掲ク

控訴御届

原被告何某へ係ル何年第何号件去ル何月何日ヲ以テ裁  
判御言渡相成候處右ハ服ス能ハサル處有之候ニ付今般  
控訴仕候間此段御届仕候也

住所

年月日

何

某印

某始審(治安)裁判所長

判事何某殿

凡ソ扣訴裁判所ニ新訴スルキニハ常ニ所長ノ名宛ヲ以テス  
ルト雖モ掛官ノ定マリタル後ハ必ズ該官ノ名宛ニテ差出ス  
ヘシ

扣訴裁判所ノ判決ヲ不法若クハ不當トシ大審院ニ上告セシ  
トスル者ハ其旨ヲ原裁判所ニ届出ツヘシ其書式ハ前ニ掲ケ  
タル扣訴届ト大同小異ナレハ茲ニ贅セス

上告チナスニ要スル書類ハ第二節第十五條ニ記載シタルモ  
ノ、外尙ホ上告届ノ寫上告通知書ノ寫宿所届ヲモ添ヘテ呈  
スヘシ其外委任ヲ受ケタル代人ニ於テハ代入願委任狀ヲ添  
ヘテ差出スハ勿論ノ事ナリトス控訴ニ於ケルモ亦同シ  
サテ上告通知書ノ書式ハ左ノ如シ



上告通知書

何裁判所何年第何号何月何日ヲ以テ御裁判相成候處右  
ハ不法ノ御裁判ト思考候ニ付今般大審院ニ上告致候間  
此段及御通知候也

住所

年月日

何

某印

何某殿(相手方ノ姓名ヲ記ス)

大審院ハ事實ヲ覆審スル處ニ非スシテ只原裁判所ニ差出シ  
タル書類并ニ證據物ニ付法律ノ當否ヲ裁判スル處ナレハ未  
タ原裁判所へ差出サル新ナル証憑ハ之ヲ提供スルハ未  
カス故ニ證據物等ハ悉皆原裁判所ニ提供シ置キ其提供シタ  
ル証憑トシテ原裁判所ノ掛官ノ認印ヲ乞受ケ置サル可ラス

出訴期限(六年十一月三六ニ布告)

金錢貸借ヲ始メトシ物品賣買ヨリ其外種々ノ取引等ニ至ルマ  
テ双方ノ者互ニ受取渡シ期限ヲ定メ條約ヲ結ヒ置キタルニ一  
方ノ者條約ヲ破リタルキハ早速裁判所ニ出訴致シ不苦候處延  
期ノ勘辨ヲ加ヒ出訴ヲ見合セ候者モ有之是亦惡愛ノ人情ニテ  
尤ノ事ニ付早速出訴致候トモ又ハ勘辨ヲ加ヘ候凡人民ノ自由  
ニ任セ出訴期限ノ法則不相定候處延期勘辨中數多ノ年月ヲ過  
去リ出訴致シ候時ハ貸方借方請人証人ノ内死亡又ハ轉住又ハ  
出踪等ノ者モ有之事理曖昧ニ立致リ裁判上不都合不少候ニ付  
訴訟ノ事柄ニ因リ夫々出訴ノ期限ヲ定メ候條來明治七年一月  
一日ヨリ後ニ結ヒタル條約期限ニテ右出訴期限ヲ過去リ出訴  
セサルモノハ自然條約ヲ取消シタル者ト看做シ受取ルヘキ者



ハ受取ルヘキ權利ヲ失ヒ引渡スヘキ者ハ引渡スルキ義務ヲ免  
レ候事ト相定メ候ニ付若シ出訴致候取上裁判不致候此旨布  
告候事

第一條

- 一 學藝ノ授業料
- 一 旅籠料
- 一 運送賃
- 一 飲食料
- 一 手附金
- 一 商人互ノ賣掛金
- 一 職人手間代金
- 一 日雇人ノ給料

一 請負金

- 一 芝居等ノ木戸錢又ハ棧敷錢等
  - 一 男女藝者ノ揚代金
- 右ハ六ヶ月

第二條

- 一 醫師ノ診察及藥料
  - 一 授業師ヨリ門弟ニ給與シタル飲食料
  - 一 商人ヨリ商人ニ非ル者ヘノ賣掛代金
  - 一 一ケ年期マテノ奉公人給料
- 右ハ一ケ年

第三條

一 期限ヲ定メタル貸附米金及ヒ利息アレハ其利息



- 一 期限ヲ定メタル預米金及ヒ利息アレハ其利息
- 一 家屋及ヒ土地ノ借賃
- 一 小作米金
- 一 証據金
- 一 敷金
- 一 物品ノ借賃又ハ損料
- 一 養育料
- 一 七ケ年期マテ奉公人給料
- 一 期限ナキ年金及一生涯ノ年金
- 右ハ五ケ年限

第四條

一條約証書中期限ナキ者ハ出訴ノ日ヲ期限ト看做シ候故何

時出訴致候テモ苦シカラサル事

第五條

- 一 従前取結タル條約ニテ明治六年十二月三十一日以前ニ條約期限ノ切レタル事件ハ右明治六年十二月三十一日ヲ條約ノ期限ト看做スヘシ又従前取結ヒタル條約ニテ其期限ノ明治七年一月一日後ニ及フ事件ハ種類ニ從ヒ出訴ノ期限ヲ起算致スヘキ事

但明治五年壬申第三百号布告第三條ニ定メタル規則ハ格別ナリトス

○(九年四月司法省四四号達)

裁判所或ハ裁判所支廳ニ勸解願出候者勸解中出訴期限満期ノ者處置方左ノ通り可相心得此旨相達候事



第一條 勸解出願ノ者勸解中ニ出訴期限ノ満期ニ至ル者ハ其勸解不調ノ翌日ヨリ満三十日迄ハ出訴期限ノ猶豫ヲ與フヘシ

第二條 勸解調ハサルキ右満三十日迄ニ府縣裁判所ニ出訴ヲ爲サハルニ於テハ其事件ニ付訴スルノ權利ヲ拋棄シタルト看做スヘシ

（十一年三月司法省丁九号達）

裁判執行ノ出訴期限ハ出訴期限規則第三條ニ準據シ五ヶ年タルヘシ

（本節ノ法理）凡ソ民法上ノ人權若クハ物權ヲ有スルモノニシテ幾多ノ時日其權利ヲ實行セサルキハ法律上ノ推測ニ依リ既ニ其權利ヲ拋棄シタルモノト見做スヲ經時効即チ期滿得免ト云フ期滿得免ノ法ハ何レノ國ノ法律ニモ之ヲ設ケサル

ハナシ本邦ノ出訴期限規則ハ乃チ期滿得免法ノ一斑ナリ

（本節ノ注意）出訴期限規則ハ訴訟人ノ須臾モ忘ルヘカテサル法ナリ世間往々自己ノ利ヲ等閑ニ付シ置キ出訴期限將ニ尽キントスルキニ及ヒ狼狽シテ出訴スルモ已ニ出訴期限ヲ經過シテ後如何トモ爲スヘカテサルニ至ルコトアリ幸ニ出訴期限ニハ間ニ合フモ多忙ノ際訴狀ヲ作ルカ爲メニ甚ダ不完全ノ体ヲ極メ終ニ負公事トナルアリ良シ負ケサルモ「ムグリ」代言ノ爲メニ此危急ノ場合ニ附ケ込マレテ非常ニ高額ノ謝金ヲ貪ホラル、コトアリ故ニ此等ノ邊ニ能ク注意シ出訴期限ノ尽キサル中ニ充分完全ナル訴狀ヲ調製シテ期限數日以前ニ出訴スヘシ

凡テ出訴期限其期限ノ尽クル日ノ午後十二時迄ヲ限リト



スルコトナレハ尋常ノ訴ノ如ク必シモ裁判所開廳中ニ出訴セ  
サルヘカラスト云フニアラス夜中ニテモ裁判所へ訴出ル片  
ハ之ヲ受理セラル、ナリ

負債者失踪後ノ訴訟(八年一月六号布告)

民事裁判所負債者失踪後ノ訴訟ハ失踪後三十六ヶ月ノ時間ハ  
採上ケサル成例ニ有之候處本年三月一日ヨリ以後ハ左ノ通相  
改メ候條此旨布告候事

第一條 債主定約期限未滿内ニ負債者ノ失踪ヲ知ルキハ定約  
滿期ニ至リ直ニ裁判所ニ訴出ツヘキ事

第二條 債主未ダ負債者ノ失踪ヲ知ラズ定約滿期將ニ尽シト  
スルヲ以テ裁判所へ出訴シ裁判所ノ奥書ヲ以テ負債者ニ掛  
合始テ其失踪ノ事ヲ知ルキハ右奥書訴狀ヲ再呈シ其旨届ケ  
出ツヘキ事

第三條 前條々ノ場合裁判所ニ於テハ一應訴狀取上ケ直ニ失  
跡者所管ノ戸長へ申付失踪ノ年月日ヲ訊明シタル上債主差



出シタル証書ニ負債者何年何月何日家出ノ未行衛相分テサ  
ルニ付追テ本人見當ルカ又ハ三十六ヶ月ノ満月後跡相續テ  
爲スヘキ者ニ掛リ此裏書証書ヲ以テ再訴致スヘキ旨ヲ記載  
シ訴狀下戻スヘキ事

第四條 債主ニ於テ前條ノ裏書証書ヲ受取置キタル上ハ本人  
見當リ又ハ搜索三十六ヶ月ノ時限ハ明治五年(十一月)第三  
百六十二号布告出訴期限ノ限内ニハ加算致サ、ル事

裁判執行

執行トハ裁判所ノ命令通り執行フノ謂ニシテ例ヘハ金ヲ返セ  
ト裁判アレハ即チ金ヲ返シ家ヲ渡セト裁判アレハ即チ家ヲ渡  
スカ如キチ云フ而シテ執行ハ曲者自ラ之ヲ爲スヘキ者ナリト  
雖モ若シモ曲者ニ於テ之ヲ拒ムカ之ヲ怠ルカ其他ノ故障ヲ申  
立テ、執行セサル片ハ直者ハ裁判ノ執行ヲ裁判所ニ求ムヘシ  
直者ニ於テ裁判所ニ其執行ヲ請願スルニハ執行願書ニ通テ製  
シ之ニ裁判狀ノ寫及ヒ其裁判ノ依據シタル證據物ノ寫ヲ添ヘ  
之ヲ其裁判ヲ爲シタル裁判所ニ呈出スヘシ扣訴裁判所ノ裁判  
ハ其始審ノ裁判ヲ爲シタル裁判所ニ請願スヘシ  
未タ確定セサル裁判ト雖モ曲者ニ於テ扣訴ノ權ヲ拋棄シタル  
時ハ之レカ執行ヲ請求スルヲ得ヘシト雖モ若シ曲者ニ於テ不



服ヲ唱ヒ扣訴届ヲ爲スルハ仮令ヒ曲者遂ニ扣訴ヲナサ、ルモ  
 其扣訴期限中ハ其執行ヲ停止セサルヲ得ス故ニ執行願ハ其裁  
 判確定シタルキニ於テナスヲ通例ナリトス  
 如此控訴ニ於テハ執行ヲ停止スト雖モ上告ニ於テハ全ク執行  
 ヲ停止スルヲ得ス只大審院ニ於テ原裁判ヲ破毀シタル時ノミ  
 執行ヲ停止スヘシ然モ外國人ニ關スル裁判ノミハ其執行ヲ停  
 止ス是レ變例ナリ其詳カナルハ載セテ第三節ニアリ  
 直者ニ於テ裁判ノ執行ヲ裁判所ニ請願スレハ裁判所ハ曲者ヲ  
 召喚シテ之ヲ命スヘシ若シ從ハサルキハ公力ヲ用ヰテ之ニ從  
 ハシムヘキナリ  
 曲者ニ於テ執行ヲ遂ケ若クハ示談ヲ以テ濟方ヲ爲シタルキハ  
 其旨ヲ裁判所ニ届ケ出ツヘシ

裁判言渡ノ後原被示談ヲ以テ特別ニ濟口ノ方法ヲ契約シタル  
 キハ已ニ其裁判言渡ヲ執行シタル者ト同ク亦裁判所ニ裁判ノ  
 執行ヲ請求シ得ヘカラサルナリ  
 裁判執行ノ期限ハ出訴期限第三條ニ依ルヘキ者ニシテ其期限  
 ハ五ヶ年ナリトス故ニ此期限内ニナサ、レハ遂ニ裁判ヲ執行  
 ナサシムルノ權利ヲ失フヘシ



身代限

確定裁判ノ効力ニ依リテ負債ヲ辨償セサル可ラサル義務アル者ニシテ到底其金圓ヲ返辨スルノ資力ナキカ若クハ資力アルモ裁判ニ服從シテ金圓ヲ返辨スルヲナサ、ルキハ裁判所ハ公力ヲ以テ負債者ニ身代限ヲ爲サシム

負債者身代限トナリタルキハ其有スル財産ハ悉ク抵償タルヘキ者ナレハ公賣シテ負債ノ辨償ニ充テサルヘカラス但シ左ニ記載シタル者抵償トシテ差押ユヘカラサル物品ナリトス

- 一 時服着替共 男女共各 二通宛
- 一 夜具 同 一通宛
- 一 本人ノ職業ニ必要ナル物品其價格五拾圓迄

尤モ本人ノ擇ム所ニ任スヘシ其直段ハ貸主借主ヨリ監定

ノ者(道具屋ノ類)一人ニ差出シ外入札人ト共ニ入札致サセ村町役人ニ於テ總入札ヲ比較シ高札ヲ以テ其價ヲ定ムヘキト

- 一 食料一ヶ月分
- 一 家族ノ多少ニ應シ一月間用ユル飲米ヲ殘シオクナリ但シ男ハ一日米ナレハ五合麥ナレハ一舛雜穀ナレハ舛五合女ハ一日米ハ四合麥八合雜穀ナレハ一舛二合ノ割合ヲ以テ殘シ置クナリ然レモ如此割合ヲ以テ殘シオクハ只米麥雜穀ノ現在セル時ニ限ル者ニシテ公賣ノ金圓中ヲ以テ購求スルノ謂ニアラサルナリ
- 一 鍋釜及ヒ炊具 各一通
- 一 官ヨリ賜リタル勳章ノ類



一 若シ本人公務アル者ハ其公務ニ必要ナル衣冠其他ノ物品

以上掲ケタル所ハ通常人ニ關スル者ナリ此故ニ僧侶ニ關スル時前ニ掲グルノ外尙ホ左ノ品々ハ差押ユヘカラサルナリ

一 建物

法用ニ必用ナル箇所

但本堂へ建添候トモ榮耀ニ属スル箇所ハ此限ニ非ス

一 寄附帳ニ記載スル部分

一 什物帳ニ區別シテ記載スル古來傳承ノ寶物并ニ法用

ニ必用ナル部分

法衣 寺主并所化及尼共

各一通宛

右ニ示シタル如ク僧侶ハ一種特別ニ抵償スヘカラサル物品ナ

有ス而シ其抵償スヘカラサル物品ノ區域ハ文字上ニ於テハ紛

雜ナキカ如クナレモ實際其區域甚々漠然タルヲ免レサルカ故

ニ左ノ規則ニヨリテ豫メ之ヲ定メオカサルヘカラス

一 寄附帳ニハ何年何月何誰寄附ノ田圃反別建造物坪數諸

器物ノ質分ニ至ルマテ詳細ニ記載スヘシ

一 什物帳ニハ法用ニ必要ノ分并ニ寺寶ヲ區別シ記載スヘシ

一 右二帳二部ツ、相綴リ檀家法類共兩人以上并ニ其地ノ

戸長檢査ノ上各姓名ヲ署シ之ニ調印シ一部ハ戸長役場

ニ藏シ一部ハ其寺院ニ藏シオクヘシ

已ニ抵償トスヘカラサル物品ノ制限ヲ説キ了レリ是ヨリ身代

限リ處分ノ手續ヲ説カン

裁判所ニ於テ身代限處分ヲ命スルハ別ニ言渡ヲナスヲ要セズ



直ニ區戸長役場ニ照會シ原告立會ノ上負債者ノ財産取調ニ着手スヘシ而シテ取調終リタルキハ其財産封管ノ手續ヲナシ負債者ヲシテ之ヲ隨意ニ處置セシムルコトヲ許サス  
右ノ如ク處分シタルキハ其處分ノ次第ヲ書シテ裁判所ノ門前并身代限人ノ門戸ニ六十日間揭示スルナリ揭示案ハ左ノ如ク

何町村

何 之 誰

右ノ者義何町村何ノ誰ヨリ何々(其事自ヲ揭シ)出訴ニ及ヒ吟味ノ上身代限申付ルニ付若シ何ノ誰ニ係リ金穀其他諸取引ノ訴有之者ハ當何日ヨリ來ル何月何日迄日數六十日內ニ當裁判所ヘ訴出ツヘシ右日限過去訴出ツルニ於テハ此度身代限分散金ノ分配ニハ不差加候也

如此揭示サレタルキハ此身代限者ニ對シ債主權ヲ有スル者ハ右期限內ニ配當加入ノ訴ヲナスヘシ配當加入ノ訴トハ債主ニ於テ自己ノ債主權ヲ有スル金額ニ相當スル分配金ヲ身代限者財産公賣金ノ内ニテ受取ラントテ請求スルノ訴ヲ云フナリ  
六十日間已ニ滿チテ財産ヲ公賣シ其金員ヲ配當スルニ當リ先取特權アル者ハ他債主ニ先チ自己ノ債主權ヲ有スル金額ヲ引去ルコトヲ得ヘシ而シテ先取特權ヲ有スル者ト雖モ其間亦甲乙ナキヲ得ス今其順序ヲ記サンニ左ノ如シ

第一 租稅

但シ特別ニ財産ヲ指定シテ附加セサル地方稅徵收ハ土地家屋ヲ餘キ其他ノ財産ニ對シテノミ先取特權アリ

第二 裁判費用



第三 公証ヲ經タル抵當アル貸金

但シ其抵當品ヲ公賣シタル代金ノミニ對シテ先取特權アリ

第四 通常ノ貸金并ニ損害

第一第二第三ハ各特權アル者ナリ第四ハ一般ノ配當法ナレハ此中ニ入ルヘキ者ニハ非サレトモ暫ク其順序ニ從ヒテ之ヲ記セシノミ

公賣代金ヲ以テ負債ノ金額ヲ償却スルニ餘リアラハ身代限ノ處分ヲ免ル、ニ至ルハ固ヨリナレトモ若シ公賣代金ハ負債ノ金額ヲ償フニ足ラヌシテ尙ホ幾分ノ義務ヲ負フキハ証文ニ裏書ヲナシ仮令ヒ子々孫々ニ至ル迄モ身代持直シ次第債主ニ償却ノ義務ヲ尽スヘキヲ命スヘシ其身代限者ニ於テ其所有物ノ

内他人へ貸付置キタル金穀ノ証文有之キハ左ノ規則ニ從フテ處分スヘキモノトス

第一條 各裁判所ニ於テ身代限ノ處分ヲ爲スニ當リ身代限ニ遭フ者ノ物件ノ内ニ身代限ニ遭フ者ヨリ他人へ貸付オキタル金穀ノ証文有之キハ其証文ノ定期限ノ滿未滿ヲ論セス証文ニ名記シタル負債主ヨリ証文面ノ通り可受取旨身代限ニ逢フ者ノ債主ニ申渡シ別紙雛形ニ倣ヒ証文ニ裏書ヲナシ其債主ニ相渡スヘキヲ

第二條 前條ノ場合ニ於テ債主其証文ヲ受取ルチ好マサルキハ其証文ハ身代限ニ遭フタル者ニ所持致サセ置クヘキ事但シ定期滿期ノ証文ニテ負債主ノ家産些少ナルモ身代限ニ遭フ者ノ債主ニ於テ負債主ノ身代限ヲ以テ現金ノ割賦



ヲ請度旨申立ルニ於テハ望ノ通り處分スルニキリ  
 第三條 債主數名ニシテ身代限ニ遭フ者ヨリ他人へ貸付置タル金穀ノ証文壹通又ハ數通ナルキハ數名ノ債主ニ入札致サセ落札ノ金圓ヲ以テ其落札シタル債主ト其他ノ債主トハ金高ニ應シテ配當シ其落札ノ証文ニハ一通毎ニ第一條ノ方法ニヨリ處分スルニキリ

但シ數名ノ債主尽ク入札ヲ不好トキハ第二條ノ處分ニ及ブヘキ

第四條 証文ヲ落札シタル債主証文ニ記名シタル負債主ヨリ金ヲ受取リタルキハ其金員中ヨリ已レテ受取ルヘキ金高ト之ヲ受取ルニ付テノ諸入費ノ金高トヲ引去リ其餘金ハ証文ニ記載シタル債主ニ返シ而シテ計算ヲナシタル明細勘定書ト

餘金ヲ返シタル受取書トヲ以テ裁判所ニ届出ツヘキ

第五條 若シ証文ヲ落札シタル債主証文ニ記名シタル負債主ヨリ金ヲ受取ラントスルニ証文ニ記名シタル負債主モ又身代限ニ遭ヒテ証文ニ記シタル金員ノ全部又ハ幾部ヲ返シ能ハサルキハ証文ニ記名シタル負債主ヨリノ証文ヲ落札シタル債主ニ對シ右ノ部分金圓ヲ身代持直シ次第返済スヘキ旨ノ証文ノ裏書ヲ裁判所ヨリ受取ルヲ得ヘキ  
 但此時曩ニ身代限ニ遭ヒタル者ノ裏書証文ヲ持出スヘシ  
 裁判所ニ於テハ之ニ金圓ノ差引ヲ記載シ二通ノ證書ヲ一綴ニシテ下附スヘシ

第六條 証文ヲ落札シタル債主証人ニ記名シタル負債主ヨリ金ヲ受取ルヘキ期限ニ至ラサルキ証文ニ記載シタル債主即



ナ曩ニ身代限ニ遭ヒシ人巳ニ身代持直シタルキハ直ニ其人  
ニ對シ再ヒ金穀ノ返濟ヲ請求スルヲ得ヘキコト  
證文裏書雛形

表書ノ貸主何ノ誰儀年号月日身代限申付候ニ付キ此證人ハ  
(入札ヲ以テ渡スルハ此間ニ入札ヲ以テノ五字ヲ書キ加フヘシ)  
某府縣管下某國某郡某町何ノ誰ヘ相渡シ候條此證書ノ金額  
ハ右何ノ誰ヘ濟口致候上其段當裁判所ヘ可届出簿  
年号月日 某裁判所印

負債主身代限ニ遭フタルキハ債主タル者ハ定約期限内ト雖  
モ訴ヘ出ツルヲ得ヘシ其規則ヲハ左ニ掲ク  
第一條 貸金穀又ハ義務ヲ得ヘキ者定約期限未滿内ニ訴出  
ルコト許サ、ル規則ナレモ其負債者又ハ義務ヲ行フヘキ者

右期限未滿ニ身代限ニ遭フキハ訴出ルコトヲ得ヘシ

第二條 定約期限未滿内ニ訴出ル者ハ滿期後訴出ル者ト同  
ノ權利ヲ有シ身代限財產糶賣金ノ配分ヲ受ルコトヲ得ヘシ

第三條 請人証人等連印シテ本人返濟相滞ニ於テハ引受返濟  
可致ノ明文有之證書ヲ取置キタル者ハ本人身代限財產糶賣  
米金ノ配分ヲ受ケ尙不足アラハ滿期ノ時ニ至リ請人証人ニ  
係リ之ヲ訴フルコトヲ得ヘシ

第四條 身代限ニ遭フ者期限未滿内ノ者ニハ滿期ノ時ニ至リ  
返濟セント欲スルキハ別段請人ヲ立テ受人ヨリ動不動產ヲ  
引當又ハ質物トナシ違變ナキヲ証シテ原告人ノ承諾ヲ求ム  
ルヲ必要トス

第五條 附籍者滿期ヲ保スル爲メ改メテ受人ヲ立テ受人ヨリ



動不動産ヲ引當又ハ質物トナシ違變ナキ夫証明シテ原告人  
之ヲ承諾スルモ其原告人ハ此回ノ身代限財産糶賣金ノ配  
分ヲ求ムルヲ得ヘカラス

第六條 定約期限未滿内ノ債主ハ身代限ニ遭フ負債主ニ對シ  
期限未滿内ニ訴フルモ滿期後ニ至リ訴フルモ其者ノ請願ニ  
任スト雖モ身代限ニ遭フ者ノ動不動産ヲ引當又ハ質物ニ取  
置キタル債主ハ右動不動産ヲ身代限ノ糶賣ヲ爲スニ付已ノ  
請取ヘキ金高ヲ求ムルヲ得ヘキノモニテ糶賣ヲサスルヲ  
拒ムヲ得ヘカラス

第七條 動不動産ヲ引當又ハ質物ニ取リタル者ハ其財産糶賣  
金ノ内ニテ金高又ハ利息アレハ利息ト共ニ定約ノ證書ニ據  
リ處分ノ時迄ノ金高ヲ計算シ請取ルヘキノ求メ夫ナシ裁判

所ニ於テハ糶賣金配分ノ規則ニ從ヒ引當又ハ質物ヲ取置キ  
タル者ニ配分スヘキ金高ヲ引渡スヘシ

第八條 引當又ハ質物ヲ取置カサル金穀ノ債主定約期限未滿  
内ニ訴出ルモ元金高又ハ利息アレハ利息ト共ニ定約ノ証  
書ニ據リ處分ノ時迄ノ金高ヲ計算シ請取ヘキノ求メ夫ナシ裁  
判所ニ於テハ糶賣金配分ノ規則ニ從ヒ處分ヲ爲スヘシ



第一條 訴訟入費償却規則(九年司法省甲五号布達)

訴訟其他書類認料(一枚十六行十五字詰ニ付拾錢但シ一枚以下モ同價) 右定限

第一 原告人ノ訴狀ノ正本副本

第二 被告人ノ答書ノ正本副本

第三 訴狀又ハ答書中ニ記載シ難キ證據ノ書類ノ寫

第四 審判中ニ原告又ハ被告ヨリ差出シタル證據ノ書類ノ寫

第五 訴訟中訴狀ニ關係スルノ事件ニ付原被双方往復ノ文書

第二條 訴訟中訴狀ニ關係スルノ事件ニ付原被双方往復ノ文書

証人并ニ引合人手当 一日ニ付五拾錢

但シ八里以外ヨリ罷出止宿ノ者ハ貳拾五錢ヲ増ス 右定限

第三條 裁判所へ出席ヲ爲シタル日

証人并ニ引合人滿八里以外ノ地ヨリ來リ滯留中ノ手当 一日ニ付金五拾錢

(本條ハ明治九年四月司法省甲第六号ヲ以テ執行停止)

第四條 証人并ニ引合人旅費滿八里ニ付拾錢歸路モ同斷 但シ八里ヲ越ユレハ每滿一里ニ付拾錢

右定限

第一 兩線ノ官道甲路ハ遠ク乙路ハ近キ時ハ現ニ甲路ヲ經



ルト雖凡乙路ヲ以テ計算スヘシ

第二 本條ハ日本國官内ヲ通行スル者ノ爲メニ設ク  
第五條

原告人又ハ被告人直ナル者ノ手當 一日ニ付五拾錢  
但シ八里外ヨリ罷出止宿スル者ハ貳拾五錢ヲ増ス  
右定限

第二條ニ同シ

第六條

原告人又ハ被告人直ナル者八里以外ノ地ヨリ來リ滯留中手  
當

一日ニ付五拾錢 (本條ハ九年四月司法省  
甲六号布達ヲ以テ停止)

第七條

原告人又ハ被告人直ナル者ノ旅費 滿八里ニ付拾錢歸路モ  
同斷

但シ八里ヲ越ユレハ每滿一里ニ付拾錢  
右定限

第四條ニ同シ

第八條

通辦雇料

一日ニ付三圓

右定限

第二條ニ同シ往復旅費ヲモ定額ノ通計算スヘシ  
第九條

翻譯料

(一枚ニ付十六行十五字詰  
二圓但シ一枚以下モ同斷)

右定限



第十條 第一條ニ同シ

測量繪圖認料

右定限

第一 長三百間ニテ尽ル時ハ 百間ニ付一尺ノ割

西ノ内一枚ニ付拾錢

第二 長六百間迄 百間ニ付五寸ノ割

同拾貳錢

第三 長千貳百間迄 百間ニ付三寸ノ割

同拾四錢

第四 長六千間迄 百間ニ付貳寸ノ割

同拾七錢

第五 長一万二千間迄 百間ニ付一寸ノ割

同貳拾錢

第六 長一万二千間以上 百間ニ付五分ノ割

同貳拾四錢

一測量ニ及ハサル見取繪圖ハ間數ノ長短ヲ論セス大凡見積ヲ以テ簡便ニ圖引致スヘシ

但シ西ノ内一枚ニ付拾錢

第十一條

使賃 滿一里ニ付拾錢 一里未滿ハ五錢但歸路モ同斷

右定限

第一 裁判所ニテ示談中双方承諾ノ上原告被告双方又ハ一方ノ者ヨリ遣シタル使賃



第二 裁判所ニテ示談中原告又ハ被告一方ノ者掛裁判役ノ檢印ヲ得タル使賃

第三 原告又ハ被告一方ノ者出訴中違約シテ出席セサル時掛裁判役ノ檢印ヲ經テ違約ヲ責ムル使賃

第四 原告被告双方ノ爲メ又ハ一方ノ爲メニ双方又ハ一方ノ者ノ申立ニヨリ裁判所ヨリ臨時ニ遣シタル使賃

第十二條

郵便并ニ電信料

定價

右定限

第十一條ニ同シ

第十三條 身代限ヲ爲スニ付裁判所又ハ縣廳又ハ町村役場ニ

納ムヘキ評價人鑑定人等ノ日雇賃金ノ諸入費及ヒ身代限諸雜費

臨時計算ヲ以テ定ム

右ハ前數條ノ入費ニ先ツテ取立ツヘシ

(本節ノ注意)訴訟入費ハ曲者ヨリ直者ニ辨償スヘキモノナレハ裁判言渡ノ節ハ必ス曲者ノ辨償ニ歸スヘキ旨ノ言渡アリ而シテ其言渡ヲ受ケタル曲者ニ於テ償却夫爲サ、ル片ハ直ニ其執行ヲ裁判所ニ請求スルヲ得但シ訴訟入費ノ言渡ハ訴訟人ヨリ請求ナキハ之ヲ爲サ、ル成規ニ付之ヲ請求セント欲スルモノハ裁判言渡前ニ申立ツヘシ而シテ之ヲ請求スルニハ通常訴狀ノ末ニ但シ訴訟入費ハ對手人ヨリ辨償ヲ受度候ト附記スル者ナレモ口上ニテ請求スルモ妨ケナシ



訴訟入費ト裁判費ト混同ス可ラズ訴訟入費ハ原告ニ於テ要セシモノナク云ヒ裁判費ハ裁判上要セシモノナク云フ即チ本節ニ掲クル所ハ訴訟用罫紙ナレモ今般發布改正後ハ訴訟印紙代價及其認料証人引合人日當、通辨雇料、翻譯料、郵便電信料、及使賃等ハ即チ訴訟入費ナルヲ以テ直者ハ明細書ヲ製シ之レニ曲者ノ認印ヲ裁判言渡ノ際請ケ置ヘシ且裁判所ニ於テ原被告及ヒ其他訴訟關係人ノ呼出ニ用ヒタル印紙代價并裁判言渡書謄本印紙代價（是等ハ曲者ヨリ裁判言渡ノ日ヨリ三日内ニ裁判所へ辨納ス）及ヒ訴訟入費償却規則第十三條ニ掲クル評價人鑑定等ノ日雇賃金身代限諸雜費ノ裁判所へ納ムヘキ分等ハ皆裁判入費ナリ

始審扣訴上告ニ通スル裁判費訴訟費ノ規則ハ明治十二年司

法省丁第十号達ニ詳ナリ今其要ヲ掲ケンニ始審ノ曲者ハ其入費ヲ負擔シ扣訴ノ曲者ハ始審扣訴兩件ノ入費ヲ負擔ス若シ上告ノ曲者扣訴ノ曲者ナルキハ始審控訴上告三件ノ入費ヲ負擔シ若シ又上告ノ曲者ハ控訴ノ直者ナルキハ只上告入費ノミヲ負擔シ其已ニ直者ヨリ受取タル始審控訴兩件ノ入費ヲ返償スヘシ大審院ニ於テ原裁判ヲ破毀シ之ヲ他ノ裁判所ニ移シタルキハ其上告入費ハ上告ノ曲者之ヲ負擔シ第二控訴ノ曲者（即チ移訴應ノ曲者）ハ始審第一控訴并ニ第二控訴合テ三件ノ入費ヲ負擔スヘシ

訴訟入費ノ制ハ始審以上ノ裁判所へ用ユルモノナレハ勸解ニハ之ヲ適用スヘカラス



治安裁判所及始審裁判所權限

第一條 治安裁判所ハ訴訟事件ヲ勸解ス

但諸官廳ニ對スル事件及ヒ商事ニ係リ急速ヲ要スル事件ハ勸解スルノ限リニアラス

第二條 治安裁判所ハ請求ノ金額及ヒ價額百圓未滿ノ訴訟ニ付キ始審ノ裁判ヲ爲ス

第三條 治安裁判所ハ人事其他金額ニ見積ルヘカラサルモノヲ裁判スルヲ得ス

第四條 始審裁判所ハ請求ノ金額及ヒ價額百圓以上并ニ第三條ニ掲ケタル治安裁判所權外ノ訴訟ニ付始審ノ裁判ヲ爲ス

第五條 始審裁判所ハ其管轄地内ノ治安裁判所ノ始審裁判ニ對スル扣訴ニ付終審ノ裁判ヲ爲ス

但シ控訴手續ハ第前ニ示ス處ト同シ

(追加) 始審裁判所ハ人民ヨリ郡區長ニ對スル訴訟ニ付始審ノ裁判ヲ爲ス

控訴裁判所權限

控訴裁判所ノ權限ハ許多ノ變革ヲ經今日ニ至テハ左ノニ權限ニ過キス

第一 控訴裁判所ハ管轄内始審裁判所ノ始審裁判ニ服セスシテ扣訴スル者ヲ復審ス

第二 人民ヨリ院省府縣ニ對スル訴訟ヲ裁判ス  
但シ院省府縣ニ對スル訴訟ハ司法卿へ奏請ノ上之ヲ受理ス



大審院權限

第一條 大審院ハ民事刑事ノ上告ヲ受ケ上等裁判所以下ノ不法ナル者ヲ破毀シテ法憲ノ統一ヲ主持スル所トス

第二條 審判ノ不法ナル者ヲ破毀スルノ後他ノ裁判所ニ移シテ之ヲ判決セシム又便宜ニ依リ大審院自ラ之ヲ判決スルヲ得

第三條 已ニ他ノ裁判所ニ移シテ之ヲ判決セシムルノ後其裁判所又大審院ノ旨ニ循ハサルキハ大審院更ニ自ラ之ヲ判決ス

第四條 陸海軍裁判所ノ裁判權限ヲ越ユル者ハ其裁判ヲ破毀シテ之ヲ當然ノ裁判所ニ付ス

第五條 (略ス)

第六條 内外交渉民刑事事件ノ重大ナル者ヲ審判ス

第七條 (略ス)

(追加) 人民ヨリ院省府縣ニ對スル訴訟ノ上告ハ司法卿へ奏請ノ上之ヲ受理ス



代人規則(六年六月二一五号布告)

人民一般商業及ヒ其他ノ事ニ因リ代人ヲ以テ契約取引等致シ候規則別紙ノ通被定候條此旨相達候事

第一條 凡ソ何人ニ限ラス已レノ名義ヲ以テ他人ヲシテ其事ヲ代理セシムルノ權アルヘシ

但本人幼年者ニテ其事理ヲ辨シ難キハ其後見人及ヒ親族ノ者協議ノ上代人ヲ任スルヲ得ヘシ

第二條 凡ソ他人ノ委任ヲ受ケ其事件ヲ取扱フ者ハ代人ニシテ其事件ヲ委任スル者ハ本人ナリ故ニ代人委任上ノ所行ハ本人ノ關係タルヘシ

第三條 凡ソ代人ハ心術正實ニシテ滿二十才以上ノ者ヲ撰ム可シ

第四條 代人ハ總理代人部理代人ノ別アリ總理本人ハ其代人身上諸般ノ事務ヲ代理スル者ニシテ部理代人ハ特ニ其委任スル部内ノ事務ヲ代理スルヲ得ルモノトス

第五條 凡ソ本人ヨリ代人ヲ任シ他人ノ契約取引等ヲ爲サント欲スルキハ必ラス實印ヲ押シタル委任狀ヲ與フ可シ但シ其家業取扱フ場所ニ於テ通常ノ事務ヲ取扱ハシムルノ類ハ別段委任狀ヲ與フルニ及ハス

第六條 委任狀ハ總理代人又ハ部理代人タルヲ及ヒ其委任シタル權限ヲ明白ニ記載スヘシ

第七條 委任狀書式左之通  
拙者總理代人ト定メ拙者ノ  
拙者部理代人儀某ノ事件ニ付何ノ誰ヲ以テ  
名義ニテ左ノ權限ノ事ヲ代理爲致候事



一何々ノ事但權限ノ次第ヲ分條記載スヘシ  
右代理ノ委任狀仍テ如件

住 所 身 分

年 月 日

姓 名 印

(後見人等ハ住所身分何誰ノ後見人何誰ト記スヘシ)

第八條 代人ヲ任スルノ期限ハ豫メ規定シ難キモノト雖モ其本人幼弱疾病事故等ニテ長ク委任セントスルキハ其地方ニ新聞紙アラハ之ニ記入セシメ世上ニ公布スヘシ

詞訟代人(十七年一月太政官壹号布達)

明治十三年(五月)司法省甲第貳号布達左ノ通改正ス  
詞訟又ハ勸解ニ付已ムヲ得ズ代人ヲ出サントスル者ハ親族又ハ相當ノ者ヲ撰ミ管轄裁判所ノ許可ヲ受クヘシ  
但代人タル者同時ニ二人以上ヨリ二件以上ヲ受任シ其他不適當ノ所爲アリト認ムルキハ裁判所ニ於テ之ヲ差止ムルコトアルヘシ



民事訴訟用印紙規則(十七年二月五号布告)

民事訴訟用印紙規則別紙之通り制定シ明治十七年四月一日ヨリ施行ス

但明治八年(十二月)第百九十六号布告訴訟用罫紙規則ハ右施行ノ日ヨリ廢止ス

右奉 勅旨布告候事

民事訴訟用印紙規則

第一條 凡ソ民事訴訟ノ書類ニハ此規則ニ從ヒ印紙ヲ貼用スルモノトス

第二條 訴狀ニハ正本一通ニ付請求ノ金額若クハ價額ニ應シ左ノ區別ニ隨ヒ其受付ノ時ニ於テ印紙ヲ貼用スヘシ  
(金額價額) 五圓マテ 貳拾錢

全拾圓迄	三拾錢	全貳拾圓迄	六拾錢
全五拾圓迄	壹圓五拾錢	全七拾五圓マテ	貳圓貳拾錢
全百圓迄	三圓	全貳百五拾圓迄	六圓五拾錢
全五百圓迄	拾圓	全七百五拾圓迄	拾三圓
全千圓迄	拾五圓	全貳千五百圓迄	貳拾圓
全五千圓迄	貳拾五圓	全五千圓以上ハ	千圓毎ニ貳圓ヲ加フ

第三條 人事其他金額ニ見積ル可ラサルモノハ三圓ノ印紙ヲ貼用スヘシ其扣訴上告ニ於テ加貼スルハ前條ニ全シ

但人事ニ於テハ極貧ノ者ニシテ戶長ノ證書ヲ所持スル者ハ裁判官ニ於テ印紙ノ貼用ヲ免スルコアルヘシ

第四條 左ノ書類ニハ正本一通ニ付貳拾錢ノ印紙ヲ貼用スヘシ



シ  
答辨書 証據物寫 辨駁書 辨論書 上申書 陳述書等  
証人鑑定人評價人引合人等ノ呼出ヲ請求スル願書  
審判ノ延期ヲ請求スル願書

第五條 左ノ書類ニハ正本一通ニ付五拾錢ノ印紙ヲ貼用スヘシ

官吏ノ臨檢ヲ請求スル願書 財産差押又ハ物品公賣ヲ請求スル願書 執行命令書ヲ請求スル願書 身代限ノ處分ヲ請求スル願書

第六條 裁判言渡書ノ謄本ヲ下附スルキ差出ス受取書ニハ其謄本壹枚五錢其他ノ謄本ヲ下附スル時差出ス受取書ニハ其謄本壹枚三錢ノ割合ヲ以テ印紙貼用スヘシ

但裁判言渡書ノ謄本ハ壹枚十二行一行十二字詰其他ノ謄本ハ壹枚二十行一行十八字詰トス

第七條 勸解ニ於テハ一件毎ニ勸解表ニ署名ノ時貳拾錢ノ印紙ヲ貼用スヘシ

第八條 此規則ニ依リ貼用シタル印紙ノ代價ハ曲者ヨリ直者ニ辨償スヘキ者トス

第九條 印紙ノ種類定價及ヒ貼用方ハ布達ヲ以テ之ヲ定ム

第十條 印紙ハ管轄廳ノ許可ヲ得タル賣捌所ニ於テ發賣セシム其他ニ於テ賣買スルヲ得ス

第十一條 官許賣捌所外ニ於テ印紙ヲ販賣シタル者ハ貳拾圓以上貳百圓以下ノ罰金ニ処シ仍ホ現在ノ印紙ヲ沒收ス其情ヲ知テ之ヲ買取シタル者ハ八拾圓以上百圓以下ノ罰金ニ処



シ仍ホ現在ノ印紙ヲ沒收ス  
第十二條 前條ノ規則ヲ犯シタル者ニ刑法ノ不論罪及ヒ減輕  
再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヰス

司法省甲第壹号告示(十七年三月五日)

今般第五号布告ヲ以テ訴訟用野紙規則被廢候ニ就テハ本年四月一日以後民事訴訟ニ關シ大審院又ハ裁判所へ差出ス書類ハ都テ美濃紙又ハ之レト全尺度ノ紙ヲ用ヰ一枚二十四行一行二十字詰ニ書スヘキモノトス  
但訴訟入費ハ明治九年當省甲第五号布達第一條第九條ニ定メタル割合ニ依リ書類認料ハ一枚金貳拾錢翻譯料ハ一枚金四圓ト相成儀ト心得ヘシ

証券印稅規則(十七年五月十一号布告)

第一條 凡ソ財產ノ授受及ヒ契約ノ証明ニ用マル証書帳簿ハ此規則ニ循ヒ印紙ヲ貼用スヘシ

第二條 証書帳簿ヲ分テ二類トナシ其稅率ハ左ノ如シ

第一類

左ニ掲クル処ノ 帳簿ハ金高ノ有無多寡ニ拘ハラズ下ニ定ムル所ノ印紙ヲ貼用スヘシ  
但當坐預リ金引出小切手ハ大藏省ニ印稅ノ押捺ヲ請フコトヲ得

- 一 當坐預リ金引出小切手 印稅 五厘
- 一 委任狀 全五厘
- 一 金高記載ナキ約定証文 全壹錢
- 一 遺物証文 全壹錢
- 一 跡式讓証文 全壹錢



- 一讓與証文 全壹錢
- 一期限ヲ定メサル預リ金証文 全一錢
- 一耕地小作証文 全壹錢 一雇人請合狀 全壹錢
- 一金高記載ナキ諸物品預リ証文 全壹錢
- 一金高記載ナキ諸物品借用証文 全壹錢
- 一住所預リ証文 全壹錢 一諸物品切手 全壹錢
- 一借地(借家)証文 全壹錢 一賣買仕切書 全壹錢
- 一保險証文 全壹錢 一諸會社株券 全壹錢
- 一送金手形 全壹錢 一金錢通帳 一年以內 全壹錢
- 一諸物品判取帳全全手錢 一結社約定書 一冊ニ付 全壹錢
- 但結社約定書ニ金圓授受貸借ニ係ル條項アリテ之カ効力ヲ確定スル証書帳簿ハ金高記載ナシト雖モ第二類金高記

載アル諸般ノ契約証書ニ準シ印紙ヲ貼用スヘシ  
 左ニ掲クル所ノ証書ハ金高五圓以上ノモノニ限リ下ニ定ムル所ノ印紙ヲ貼用スヘシ  
 一營業ニ關スル送狀印稅壹錢 一營業ニ關スル請取書同一錢  
 右諸証書ヲ通帳トナスルハ都テ一年以內一冊ニ付壹錢ノ印紙ヲ貼用スヘシ

第二類

左ニ掲クル所ノ証書ハ金高ノ多寡ニ隨ヒ下ニ定ムル所ノ割合ヲ以テ印紙ヲ貼用スヘシ但爲換手形約束手形ハ手形用紙ヲ用フヘシ  
 一金錢借用証文 一住所賣買証文  
 一金高記載アル諸物品預リ証文



一金高記載アル諸物品借用証文		
一諸物品賣買証文		
一金高記載アル諸般ノ契約証書	一金錢定期預リ証文	
金高壹圓以上貳拾圓未滿	印稅	壹錢
金高貳拾圓以上五拾圓未滿	全	貳錢
金高五拾圓以上百圓未滿	全	四錢
金高百圓以上百五拾圓未滿	全	六錢
金高百五拾圓以上貳百圓未滿	全	八錢
金高貳百圓以上三百圓未滿	全	拾壹錢
金高三百圓以上四百圓未滿	全	拾四錢
金高四百圓以上六百圓未滿	全	貳拾錢
金高六百圓以上八百圓未滿	全	二十六錢

金高八百圓以上千百圓未滿	全	三拾二錢
金高千百圓以上千四百圓未滿	全	三拾八錢
金高千四百圓以上千七百圓未滿	全	四拾四錢
金高千七百圓以上貳千圓未滿	全	五拾錢
金高貳千圓以上貳千五百圓未滿	全	六拾錢
金高貳千五百圓以上三千圓未滿	全	七拾錢
金高三千圓以上三千五百圓未滿	全	八拾錢
金高三千五百圓以上四千圓未滿	全	九拾錢
金高四千圓以上	全	壹圓

右諸証書ヲ通帳トナスル其附近見積金高ニ隨ヒ下ニ定ムル所ノ印紙ヲ貼用スヘシ

金高百圓未滿 印稅 四錢



金高百圓以上總テ諸証書稅率ニ據ルヘシ  
 一金錢當座預リ証文 一質物預リ書  
 金高壹圓以上貳拾圓未滿 印稅 壹錢  
 金高貳拾圓以上 全 貳錢  
 右諸証書ヲ通帳ト爲スキハ其附込見積金高ニ隨ヒ下ニ定ム  
 ル所ノ印紙ヲ貼用スヘシ  
 金高百圓未滿 印稅 貳錢  
 金高百圓以上 全 四錢  
 一爲換手形 一荷爲換手形 一約束手形  
 金高五拾圓未滿 印稅 壹錢  
 金高五拾圓以上百圓未滿 全 貳錢  
 金高百圓以上貳百圓未滿 全 四錢

金高貳百圓以上五百圓未滿 全 八錢  
 金高五百圓以上千圓未滿 全 拾五錢  
 金高千圓以上貳千圓未滿 全 二拾五錢  
 金高貳千圓以上 全 五拾錢  
 第三條 前條ニ掲クル所ノ証書帳簿ト効用ヲ全フスル者ハ其  
 名稱ニ拘ハラヌ稅率ニ照シ相當ノ印紙ヲ貼用スヘシ  
 第四條 印紙ヲ貼用スヘキ証書帳簿ニシテ第五條ノ手續ニ循  
 ヒ印紙ヲ貼用セサルモノハ民事裁判上之ヲ受理セス但處罰  
 ナ受クル後印紙ヲ貼用シタルモノハ此限ニ非ス  
 第五條 印紙ハ証書ノ差出人又ハ帳簿主ニ於テ証書ハ授受ノ  
 前帳簿ニ使用ノ前ニ貼用シ証書帳簿記名ノ下ニ押捺スル印  
 ナ以テ証書帳簿ノ紙面ト印紙ノ彩紋トニガケテ消印スヘシ



第六條 印紙及ヒ手形用紙ノ種類定價ハ布達ヲ以テ之ヲ定ム  
第七條 印紙及ヒ手形用紙ハ官ノ許可ヲ得タル賣捌所ニ非サ  
レハ之ヲ賣捌クヲ得ス

第八條 印紙ヲ貼用スヘキ帳簿仕切書送り狀ハ主任官之ヲ檢  
査スルヲアルヘシ

第九條 左ニ掲クル所ノ証書帳簿ハ印紙ヲ貼用スルヲ要セ  
ス

- 一 官廳ヨリ差出ス証書帳簿
- 一 官吏準官吏若クハ布告布達又ハ達ヲ以テ定メタル議員若  
クハ公立學校病院ニ從事スルモノ各其職務ニ依テ用フル  
証書

一 國庫金取扱所又ハ爲換方ヨリ官廳ニ差出ス預リ金ニ對ス

ル 抵當証書

一 國庫金取扱所又ハ爲換方ヨリ官廳ニ對シタル諸上納金ノ  
預リ証書帳簿

一金員記載アル官廳ヨリノ命令書ニ對シ國庫金取扱所又ハ  
爲換方ヨリ差出ス請書

一 諸上納金ニ付國庫金取扱所又ハ爲換方ヨリ納人へ差出ス  
請取証書

一 罹災救助金献金寄附金ニ關シ人民ヨリ官廳ニ差出ス証書

第十條 第二類ノ帳簿ハ初丁へ附込見積金高及ヒ使用期限紙  
數ヲ記載スヘシ但物品ノ授受ニ關スルモノハ其代價ヲ記載  
スヘシ

第十一條 証書帳簿ニ税率ノ異ナルモノヲ雜記スルキハ各相



當ノ印紙ヲ貼用スヘシ

第十二條 印紙貼用濟第二類ノ帳簿見積金高又ハ使用期限ノ満チタルキハ其旨該帳簿ニ記載シ置キ主任官檢査ノ節之レニ調印ヲ受クヘシ

第十三條 前條ノ帳簿餘白アリテ尙之ヲ使用セントスルキハ第十條ノ手續ヲ以テ更ニ相當ノ印紙ヲ貼用スヘシ

第十四條 第二類ノ帳簿見積金高未タ滿タサルカ又ハ使用期限未タ尽キサルニ紙數尽キタルキハ更ニ紙數ヲ増加スルヲ得此場合ニ於テハ其帳簿初丁見積金高又ハ期限ノ側ニ其事由及ヒ増加シタル紙數ヲ記載スヘシ

第十五條 証書帳簿ニ外國貨幣ヲ以テ員數ヲ記載スルキハ内國ノ貨幣ニ改算シタル金高ヲ附記シ相當ノ印紙ヲ貼用スヘシ

第十六條 取換セ証書ハ双方トモ相當ノ印紙ヲ貼用スヘシ

第十七條 証書ニ副証書ヲ附シ又ハ裏書等ヲ爲シ本証書ノ効用ヲ異ニスルモノ若クハ金高ニ増減ヲ生スルモノハ其副書又ハ其裏書ニ就キ更ニ相當ノ印紙ヲ貼用スヘシ

第十八條 此規則ヲ犯シ脱税ニ係ルモノハ處罰ヲ受クル後証書帳簿ノ受取人ニ於テ相當ノ印紙ヲ貼用スルヲ得

第十九條 印紙ヲ貼用スヘキ証書帳簿ニ之ヲ貼用セス若クハ貼用不足スルモノ及ヒ手形用紙ヲ用ヒス若クハ不足税ノ手形用紙ヲ用ヒタルモノハ脱税高二十倍ノ科料又ハ罰金ニ處ス其証書帳簿ヲ受取タルモノ亦全シ

第二十條 第十八條ノ場合ヲ除クノ外第五條ノ手續ニ據テ消



印ヲ爲サス又ハ他ノ印ヲ以テ消印シタルモノハ印稅高十倍ノ科料又ハ罰金ニ處ス其証書帳簿ヲ受取タルモノ亦全シ

第廿一條 此規則ヲ犯シタル証書帳簿ニ請人証人トシテ加印シタル者ハ各正犯ニ係ル科料罰金ノ半額ニ相當スル科料又ハ罰金ニ處ス

第廿二條 第八條ノ証書帳簿ノ檢査ヲ拒ミタルモノハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第廿三條 第十條及ヒ第十三條ヲ犯シタルモノハ二圓以上十圓以下ノ罰金ニ處ス

第廿四條 第十二條及ヒ第十四條ヲ犯シタルモノハ二圓以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

第廿五條 第七條ヲ犯シタルモノハ所持ノ印紙及ヒ賣得金ヲ

沒收シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第廿六條 前數ノ罪ヲ犯シタルモノニハ刑法ノ不論罪及ヒ減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

訴訟人心得終



明治十九年三月二十九日御届  
全 年六月卅日出版

長野縣平民

{定價拾五錢}

編輯者  
出版人

中澤清太郎

信濃國北佐久郡  
岩村田町第百五拾八番地住

### 發賣書肆

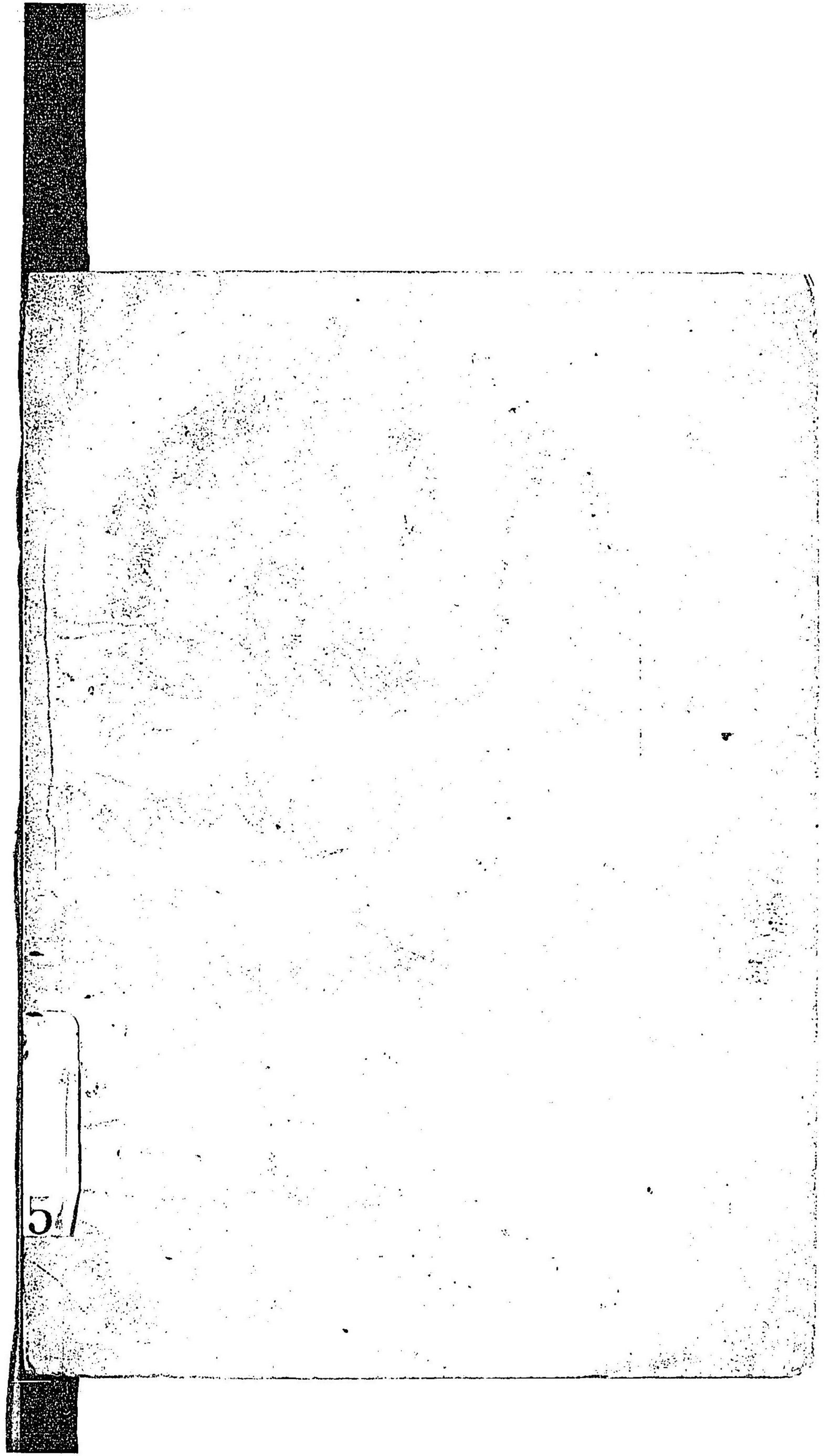
信州南佐久郡曰田  
全 長 松 岩 小 上  
全 全 全 全 全  
野 本 田 諸 田

依田儀三郎  
西澤喜太郎  
高見甚左衛門  
中澤儀兵衛  
相場七左衛門  
井出孫一  
上田印刷會社

發行所

岩村田活版所





5



036825-000-7

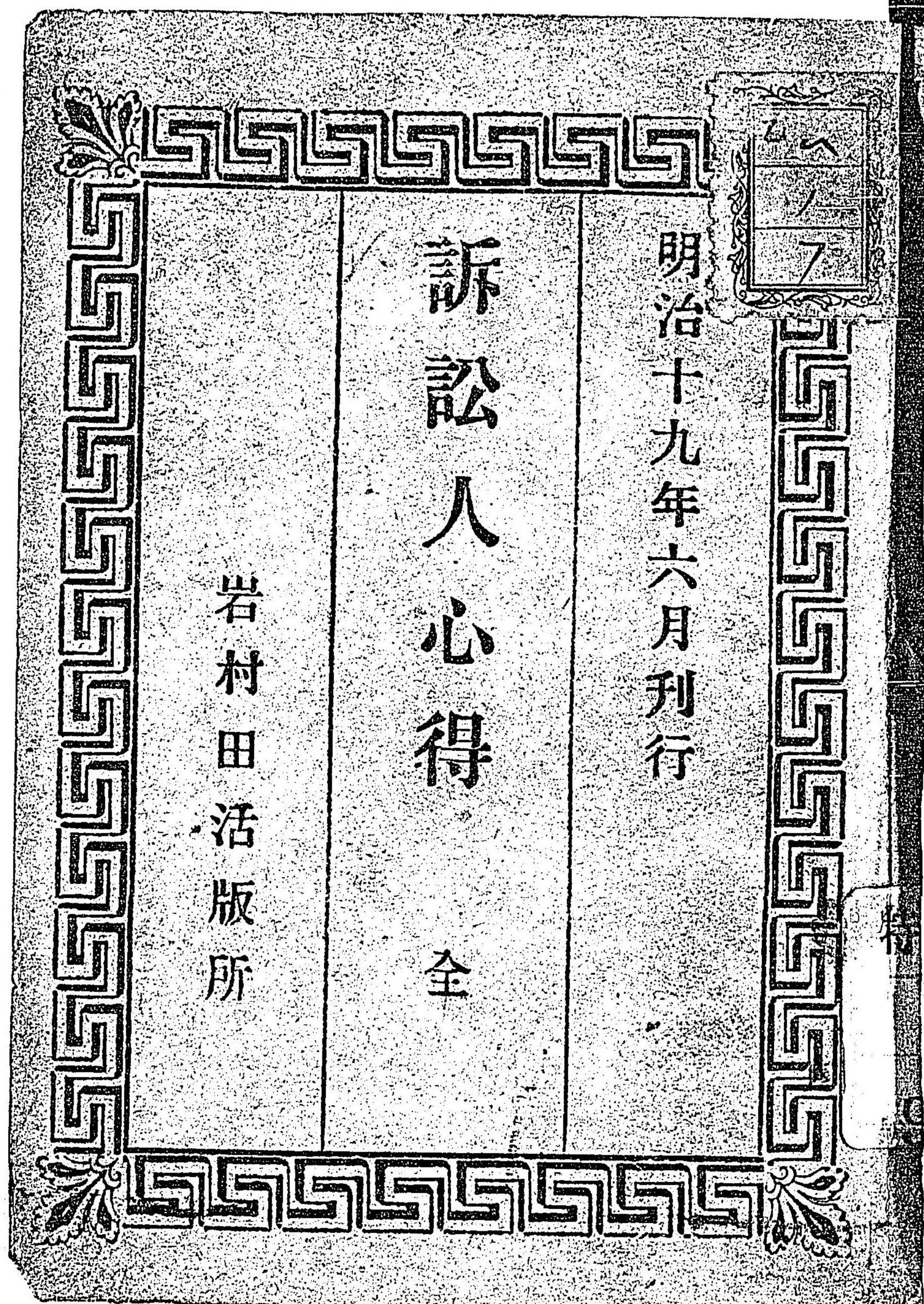
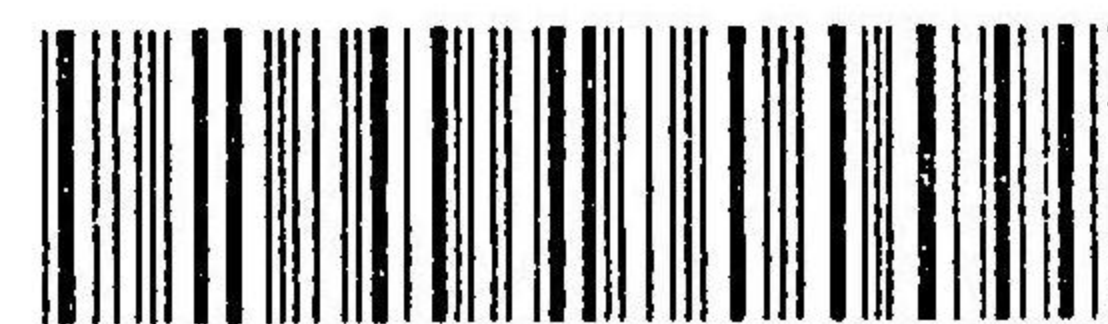
特62-985

訴訟人心得

中沢 清太郎 / 編

M19

BBS-0291



訴訟人心得

全

明治十九年六月刊行

岩村田活版所